

聖書：Iサムエル3：1～21

説教題：しもべは聞いております

日時：2015年9月13日

この3章で少年サムエルがいよいよ預言者としての召しを神から受けます。まずこの章を読む上でカギとなるのは1節です。「少年サムエルはエリの前で主に仕えていた。そのころ、主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった。」御言葉があった時代として思い起こされるのはモーセの時代、またそれに続くヨシュアの時代でしょう。神はモーセを通して御言葉を語り、イスラエルをエジプトから導き出してくださいました。そしてモーセの死後はヨシュアを通して御言葉を語り、イスラエルは約束の地の多くを獲得することができました。しかし今日見ている時代には、「主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった。」なぜでしょう。神の気まぐれによるのでしょうか。サムエル記の前の士師記を読むなら、それはイスラエルの不従順ゆえと分かります。士師記の時代を要約する言葉として、士師記21章25節にはこうありました。「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。」主の御言葉を退けて、それぞれが自分に良いと思うことを勝手に行なって生活していた。そういう彼らにはもはや御言葉が与えられないという状態になっていた。山上の説教の中に「聖なるものを犬に与えてはいけません。また、豚の前に、真珠を投げてはなりません。」とありますように、もし私たちが御言葉を軽んじ、これに聞き従わないなら、主はいつまでもそれを差し出し続けることをなさらないのです。

この原則は聖書の色々な箇所に見られます。たとえばこの後、サムエル記28章でサウル王がこんなことを言います。彼はイスラエルの最初の王となる人ですが、主の御言葉に従わず、その地位から下ろされて行きます。そんな彼がペリシテ人との闘いにおいて、相手の軍勢を見て恐れ、御心を伺おうとしたものの、さっぱり主からの答えがない。そして呼び寄せた霊媒に対し、「私は困りきっています。ペリシテ人が私を攻めて来るのに、神は私から去っておられます。預言者によっても、夢によっても、もう私に答えてくださらないのです。」とオロオロする場面が出てきます。また紀元前8世紀の預言者アモスは、不従順なイスラエルに対し、やがて

飢饉が来ると警告しました。その飢饉とはパンの飢饉ではなく、実に御言葉を聞くことの飢饉である、と。イエス様も人々が不信仰な地域では、その不信仰ゆえに力あるわざがでしなかつたと記されていますし、また十字架直前にヘロデがイエス様に質問した時も、何も答えてもらえませんでした。彼はかつてバプテスマのヨハネの言葉を聞くのを楽しみとし、ある意味で御言葉に興味を持っていた人ですが、与えられたチャンスを繰り返し退けた結果、会ってみたいと願っていた主に会っても、主が何も語って下さらないという報いを受けることとなったのです。

しかし今日の箇所が私たちに語る素晴らしいメッセージは、主がイスラエルになお御言葉を語ろうとしてくださったということです。主はここでサムエルの名を何度となく呼んでいます。4 節に「そのとき、主はサムエルを呼ばれた。」とあります。そして4~10 節までの間に「呼ぶ」という言葉が 11 回も出て来ます。明らかにこれはこの章のテーマを指し示しています。サムエルは最初、それが主からの呼びかけだとは分からずに、繰り返しエリのところに走って行きます。そしてエリから繰り返し、「私は呼ばない。帰って、おやすみ。」と言われます。7 節に「サムエルはまだ、主を知らず、主のことばもまだ、彼に示されていなかった。」とある通りです。しかし主は彼を呼ぶのをやめず、なお「サムエル、サムエル」と呼びかけています。これはイスラエルに御言葉を与えようとする主のあわれみと熱心を示しているでしょう。そしていつ、主の言葉は具体的に語られ始めたのでしょうか。それはサムエルがエリに導かれて、10 節のように「お話してください。しもべは聞いております。」と主に応答した時でした。ということは、いかに私たちの主に聞く姿勢、その心の用意・態度が重要かということではないでしょうか。士師記の時代以降、イスラエルは主の御言葉に聞かず、御言葉はまれにしか示されないようになっていました。しかし、「お話してください。しもべは聞いております。」と答えるサムエルの姿をもって、主は再び語り始めてくださったのです。そしてここから主がともにいて、イスラエルを導いてくださる祝福が取り戻されて行く様子を私たちは見るのです。

さて、それにしても主が語られた御言葉の内容は厳しいものでした。少年サムエルが「しもべは聞いております」と主を待ち望んだ話は有名ですが、その彼にどん

な言葉が語られたか、すぐに言い当てることのできる人はそう多くないかもしれません。多くの人は、きっと神は少年サムエルに暖かい言葉、慈しみの言葉を語られたのではないかと思うのではないのでしょうか。しかし 11 節以降から分かることは、彼に語られたのはエリの家に対する恐ろしいさばきについてでした。11～14 節:「主はサムエルに仰せられた。『見よ。わたしは、イスラエルに一つの事をしようとしている。それを聞く者はみな、二つの耳が鳴るであろう。その日には、エリの家についてわたしが語ったことをすべて、初めから終わりまでエリに果たそう。私は彼の家を永遠にさばくと彼に告げた。それは自分の息子たちが、みずからのろいを招くようなことをしているのを知りながら、彼らを戒めなかった罪のためだ。だから、わたしはエリの家について誓った。エリの家は、いけにえによっても、穀物のささげ物によっても、永遠に償うことはできない。』」サムエルはさっそくこの言葉を取り次ぐように導かれます。

翌朝サムエルはエリから、主がどんなことを語られたのか、残らず話すようにと言われます。17 節にある通り、「もし、おまえにお告げになったことばの一つでも私に隠すなら、神がおまえを幾重にも罰せられるように。」と言われます。サムエルにとってそれは恐ろしいことだったでしょう。エリは自分を父親のように育ててくれた恩師です。その恩師を思うなら、15 節にあるように、「この黙示についてエリに語るのを恐れた」とあるのは当然でしょう。サムエルはどうしたでしょう。18 節に「サムエルは、すべてのことを話して、何も隠さなかった。」とあります。彼はこうして、主の御言葉を取り次ぐという大切な使命の第一歩を踏み出すように導かれたのです。誘惑としては、厳しい内容をいくらかでも削除し、さばきの宣告をいくらかでも和らげて語ること、あるいは主が語っていない慰めを人間的にそこに織り交ぜることがあったでしょう。しかし預言者は主のことばをその通りに、足したり薄めたりせず、忠実に伝える者でなければなりません。一方でサムエルはこのことを無神経に行なったのではありませんでした。彼は心に痛みを覚えつつ、このことをしました。これは預言者が経験して行かなければならないジレンマと言えます。この両方が必要なのです。

ですからもし説教者として立てられた人が、聞く人々を神のことばの批判の下に

置かないなら、すなわち罪について語らず、人々に受け入れられやすい耳触りの良い言葉だけを語るなら、私たちはその人を疑ってみなければなりません。その人は詐欺師ではないのか、偽教師ではないのか、と。その一方で、その説教者のメッセージはいつもさばきの一本調子で、思いやりや心の痛み、同情や慰めが滅多に見られないなら、それもまた疑わなくてはなりません。この人は本当に、語る相手のことを心にかけている預言者なのか、と。サムエルはこの苦しい経験をさっそくここでさせられたのです。そしてその中で彼は忠実に神のこトばを取り次ぐ器であることを示したのです。

こうして預言者サムエルの誕生となります。彼を通してイスラエルに御言葉の祝福が回復されて行ったことが19～21節に記されています。20節の「ダンからベエル・シェバまで」とは、約束の地の北から南までという慣用句です。また21節で新改訳は「主は再びシロで現われた」と訳していますが、「再び」という言葉は新共同訳では「引き続き」と訳されていて、そのニュアンスは「継続して」ということです。すなわちこれまでの「主の言葉はまれであった」という状態に取って代わって、主の言葉が継続的に、引き続き、彼らの間にあるという新しい時代が幕を明けたのです。そして4章1節に記されているように、サムエルを通しての主のこトばが全イスラエルに行き渡るといふ祝福へと導かれて行ったのです。

私たちはこの記事を通して、恵み深い神を仰ぎ見て御名を賛美し、礼拝したいと思います。本来イスラエルは、御言葉のない闇に捨てられてもおかしくなかったのに、神ご自身の方から御言葉を与えるための働きかけをしてくださいました。神ご自身がなおも語り続けてくださいました。そしてこのお姿を見つめる時に思い起こすことは、神は時至ってついに御子においてはっきり語ってくださったということです。ヘブル人1章1～2節：「神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました。この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。」この御子において語るといふ啓示の頂点に向かって、神はそのわざを続けてくださったのです。ここでやめずに、なお語り続けて、ついにイエス・キリストにおいて最終的に、また十分に私たちにご自身とその道とについて示してくださいました。この神の熱心とあわれみとを思って、

今夕、心からの感謝の礼拝を神にささげたいと思うのです。

そしてこの恵みを思うなら、私たちの応答も益々重要な意味を持つこととなります。確かに神はキリストにおいて最終的に、十二分にご自身を啓示してくださいました。私達の手にはすでに完結した聖書 66 巻が与えられています。しかしだからと言って、私たちは御言葉の飢饉の悲惨に陥ることはないとは言えません。イザヤ書 6 章には「聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな」という言葉があります。すなわちいくら御言葉を耳で聞いても、それを悟ることができない。いくら書かれた文字を目で追っても、それが生きた力をもって自分に臨むことがない。右から左へとスーッと通り過ぎて行くだけ。もし私たちが不従順であるなら、いくら聖書を手にしても、神が実質的にお語りくださらないということが起き得るのです。そして神が最終的に御子において語っておられるという大きな恵みの中に生かされている分だけ、これをないがしろにした責任は一層重く問われることになるのです。

そんな私たちが今日の箇所から学ぶことができるのは、やはりサムエルの態度でしょう。「しもべは聞いております。主よ、お話してください。」 毎日の聖書通読・ディボーションの時も、礼拝で御言葉の説教を聞く時も、あるいは聖書の学びをする時も、このあと何を食べるかとか、どんな楽しいことをするか、で頭が一杯になって、神の言葉をそっちのけにする態度ではなく、主が私たちに語ろうとしていてくださることに心から感謝して、私たちの方では「主よ、お話してください。しもべは聞いております。」と心の耳をそばだて、示されたことに従う従順の思いで聞き入る。その者に神は豊かにご自身のお心を分かち合ってくださいます。そして主がともにいてくださるという臨在の祝福がそこから広がって行くのです。私たちはそのために、熱心に語ってくださる主にふさわしく、へりくだって、感謝して、日々御言葉に聞く歩みをして行きたい。そして主が豊かに私たちの間に住んでくださり、さらにその祝福が周りの人々に広がって行く祝福に歩ませていただきたいと思うのです。